

分かる喜びを知り、自ら主体的に学ぼうとする子の育成 ～基礎基本の定着を図り、確かな学力の向上を目指す～

御所市立掖上小学校

平成 20 年度より「全国学力・学習状況調査結果を活用した調査研究」の実施校として、本校児童の学力向上を目指して取組を進めてきた。過去 2 年間の取組では、「知識・技能」の部分でほとんどの学年で一定の成果が見られた。その一方で、少し難しい問題に直面した時に「自ら考えようとしないう」「すぐにあきらめてしまう」児童、「活用力・表現力」が乏しい児童の実態や、基本的な生活習慣や家庭での学習習慣が定着していない、単に学校の取組の強化だけでは解決することのできない実態が見られた。家庭の支援、協力を得ながら進めていくことが学力向上には欠かすことができない要素であることを確認し、取組を進めてきた。

昨年度は萱野小学校から、学び合いの授業形態やメタ認知が働く子を育てる具体的な取組を学び、三重大学附属小学校の研究発表会からは、本校でも取り組める内容を多く学んだ。また、すずかけタイムや算数チャレンジタイムの取組も定着し、児童の学力向上につながっている。家庭学習支援研究部から出された保護者への啓発プリントや、生活記録票も、学年末に行ったアンケートの結果、子どもたちの学習意欲向上や保護者の関心の高まりにつながっていることが分かった。

今年度は、より一層基礎基本の定着を図りながら、言語活動を効果的に活用し、思考力・判断力・表現力を高める授業の在り方についての研究を中心に、下記の柱を立てて取組を進めてきた。

主題に迫るための 三つの柱

- 1 教員の指導力を高める取組
- 2 基礎基本の定着を図る取組
- 3 家庭学習を充実させる取組

(1) 学力調査活用アクションプランを活用した取組の実際

①教員の指導力を高める取組（授業力向上研究部）

自ら考え、問題を解決しようとする子どもを育てるために

本校児童の「全国学力・学習状況調査」結果では、記述式問題の正答率が低い実態がある中で、児童の様々な考えを引き出したり、思考を深めたりするような発問や指導を工夫したり、児童の発問や活動の時間を確保して授業を進めたりするなど、言語活動を積極的に取り入れた授業を工夫し、児童の主体的な学習を充実させる。

○各学年の推進計画を立てる。

○研究授業を通して学び合う。

日程	学年・組	授業者	教科	指導助言者
6月16日(水)	4年1組	橋本	算数	県指導主事 椿本剛也先生
6月30日(水)	5年	岸本	算数	県指導主事 椿本剛也先生
10月13日(水)	4年2組	西浦	人権	大福小学校 佐藤千恵美先生
10月27日(水)	1年	松本	算数	県指導主事 椿本剛也先生
11月10日(水)	2年2組	水田	人権	元教員 谷本恵子先生

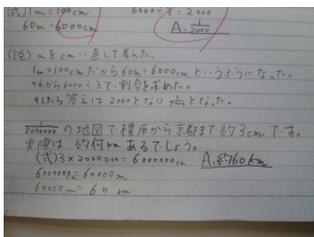
○様々な場面における「言語活動」を重視した取組

ア 算数科

言語活動を通して付けたい力

算数的活動を通して、計算の意味や計算の仕方・図形の面積の求め方などを、具体物を用いたり、言葉、数、式、図、表、グラフなどを用いたりして考え、説明・表現する活動を行うことで、数学的な思考力・表現力を育てる。

このことを意識して、どの学年も、児童が課題に対してまず自分で考える。その考えを式・図などを用いてノートに書いたりして、となり同士やグループで互いに意見を交流する。そして全体の場で相手に分かりやすく説明するといった授業形態を心がける。意見を交わすことの楽しさや、友達の考えからの発見や学び、自分の考えを発表する満足感・成就感を味わうことを通して主題に迫りたい。



〔第6学年算数「比」の学習から〕

イ 朝の会・帰りの会・学級活動などを利用したスピーチタイム

毎日の継続的な取組として、各学年でスピーチタイムを実施している。高学年では、スピーチメモを持たせ、翌日のスピーチで話す内容の構成を考えさせている。また、学級活動や国語の時間を利用して、サイコロトークなどテーマを決めて人前で話したり、聞き合う活動をしたりしている。これらの活動を通して人前で話すことに抵抗をなくしていくこと、人の話をしっかりと聞くこと、互いのスピーチを通して互いを知るといった集団づくりにも役立っている。



〔第6学年朝の会〕



〔第1学年帰りの会〕



〔第1学年自分の気持ちカード〕

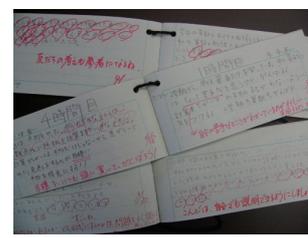
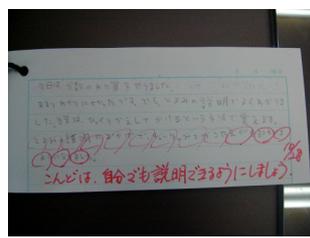
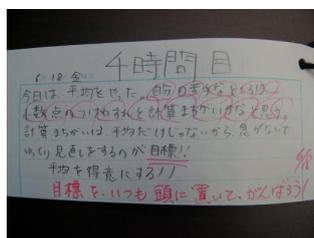
○授業公開週間を設けて、授業の公開を行う。

ア 6月7日(月)～11日 高学年(第4、5、6学年)

イ 11月15日(月)～19日 低学年(第1、2、3学年)

参観者が「よかったところ」「気になったところ」などの感想を参観用紙に記入し担任に伝える。

○算数日記に取り組む。(全学年で徹底する)



算数日記のねらい

学習内容を振り返り、分かったことや、さらに出てきた疑問に気付くことができる児童を育てる。

児童への働きかけ

今日の算数の時間で、分かったこと、分からなかったこと、友達の考えなどでよかったところなどを書こう。

更なる成長のために

学習を振り返って書いている算数日記はみんなに紹介する。
日記の内容がねらいに合ったものになるように、適切なコメントを書く。

○各種研修会への積極的参加

名柄小学校 平群西小学校 箕面市立萱野小学校 三重大学附属小学校など

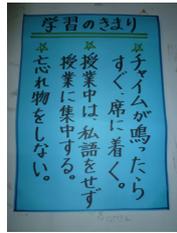
②基礎基本の定着を図る取組（基礎学力研究部）

○「すずかけタイム」（毎朝の15分間）を活用し、日常継続的な取組を充実させる。

月	火	水	木	金
朝礼がない週は 学級裁量	読書	視写	読書	算数(計算領域)

○「読書の木」「読書カード」の作成（校内環境整備）

○「話し方の基本話型」「学習規律」の作成（教室環境整備）



(読書の木)



(読書カード)

○算数チャレンジタイムを実施し、低学力の克服に努める。（火曜日放課後）

ア 毎週火曜日放課後実施。（第1、2学年は6時間目。第3～6学年以上は7時間目。）

イ 算数科に課題をもつ児童を対象に行う。

ウ 対象児童については、保護者に主旨を説明し、理解を得る。

エ 学習内容については、各学級担任が児童に合った課題を設定し、指導する。

オ 算数に対する苦手意識の克服や分かる喜びを味わわせる。

○授業開始10分間で行う基礎学力の充実

ア 国語……ミニ漢字テスト（その日のうちに返し、次への意欲をもたせる。）
音読（教科書教材を順番に読ませる。）

イ 算数……百マス計算等、「数と計算」の領域に絞った復習を行う。

第4学年以上では、特に筆算の定着を図る。

○個に応じた学習に対応した問題データベースの導入

（活用例）

・各単元の「ドリルプリント」を家庭学習にして取り組ませ、確かめさせる。

・各単元の「ドリルプリント」「フォローアッププリント」「たしかめプリント」「チャレンジプリント」と各自の習熟度に合わせて取り組ませる。

③家庭学習を充実させる取組（家庭学習支援研究部）

○家庭学習についての実態アンケートを実施する。

○家庭学習の内容や量などについて全職員で共通理解を図る。

○保護者への啓発を図る。（低・中・

高学年別にプリントの配布）

・家庭学習の重要性に関する学校の方針を伝える。

・家庭における学習時間の確保。

・基本的な生活習慣についての呼びかけ。（早寝早起き・朝食・ゲームの時間等）

○生活記録票

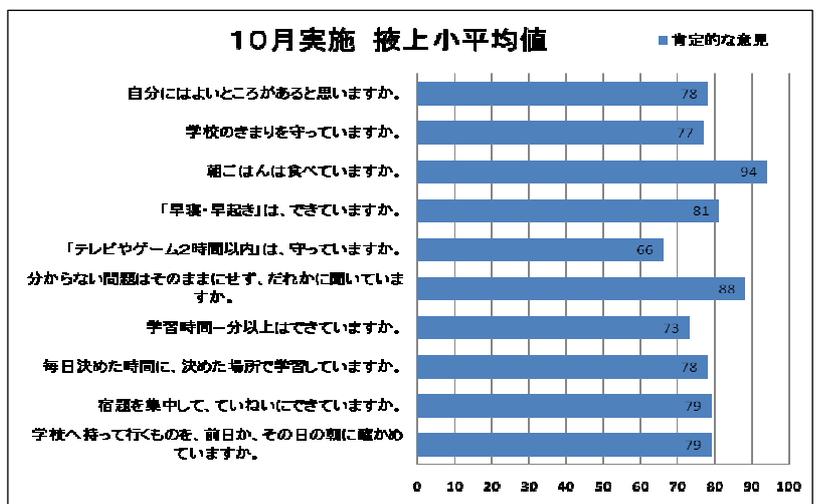
・月1回、一週間を通して家庭学習の状況の把握。（保護者が生活記録票にコメントを記入）

○生活アンケートの実施（5月・

7月・10月・2月に実施）

○成果として見えてきたもの

・アンケートをとることで、教



員側のねらいも明確になり、学級での声かけが具体的かつ継続的にしやすくなった。

- ・分析・考察を行うことで、児童の家庭での学習状況について考え、学習時間だけでなく「学習の質」に目を向けることができた。
- ・分析・考察を行うことで、家庭との連携も課題を明確にして行うことができた。
- ・学級では、宿題の提出物がなかなか揃わなかったのが、一回で揃うようになった。また、漢字や計算もていねいに行う児童が増えていった。

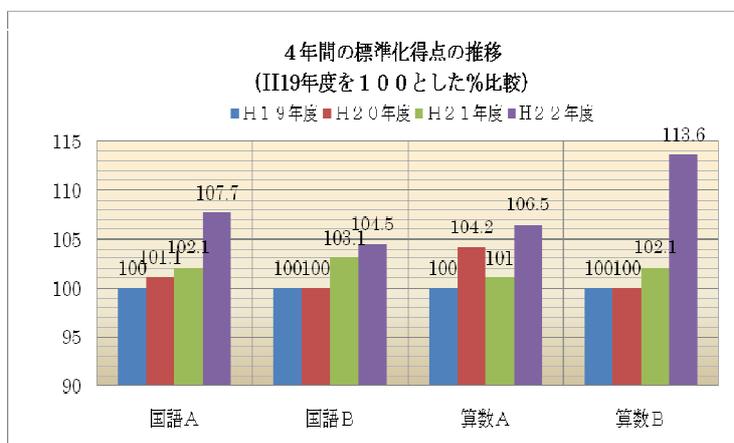
(2) 結果と考察

①全国・県との比較から見た学力

○全国学力・学習状況調査結果

平成 19 年度の本校児童の標準化得点を 100 とし、この 4 年間の標準化得点を算出した(グラフ 1)。対象児童が異なるので一概には言えないが、今年度は、正答率が国語 A・算数 A・B で 0.3~3.1 ポイントではあるが、初めて県平均を上回った。下回った国語 B でも、2.5 ポイント差であった。この 2 年間の成果と考えられる。

グラフ 1



○県学力診断テスト結果

国語科においては、第 5 学年を除いて県平均を下回っているが、平成 21 年度に比べて、その較差は縮まってきた。

算数科においては、第 1 学年を除いた全ての学年で県平均を上回った。特に第 6 学年は、前年が -1.2 であったのが今年は +13.5 となり、約 15 ポイントの上昇となった。同様に第 2 学年も -8.8 から +1.6 と約 10 ポイントの上昇が見られた。算数科に絞った取組の結果が表れてきた。

表 1 奈良県県学力診断テストとの正答率較差

		H19年度	H20年度	H21年度	H22年度
国語	1年	-15.1	+0.7	-12.6	-10.7
	2年	-3.8	-5.6	-9.1	-4.0
	3年	-7.7	+1.9	-9.2	-1.6
	4年	-3.6	-3.4	+6.1	-4.5
	5年	-10.6	-4.5	-8.4	+1.6
	6年	-8.0	-4.6	-9.0	-7.0
算数	1年	-15.4	-3.5	-8.8	-4.3
	2年	-2.7	-2.7	+5.7	+1.6
	3年	-3.3	-3.8	-3.2	+3.3
	4年	-1.5	-2.0	+12.7	+2.3
	5年	-9.0	-4.6	-1.2	+0.8
	6年	-12.7	-2.7	-2.3	+13.5

○指導工夫の改善に関するアンケート結果(第 6 学年対象)から

<評価指標 2>

- ・「普段の授業で自分の考えを発表する機会が与えられているか」
肯定意見 (4月) 54.0% → (1月) 94.2%
- ・「普段の授業では、学級の友達との間で話し合う活動をよく行っていると思うか」
肯定意見 (4月) 54.0% → (1月) 91.9%
- ・「自分の考えを他の人に説明したり、文章に書いたりするのは苦手ではない」
肯定意見 (4月) 29.8% → (1月) 41.6%

○学習意欲の向上に関するアンケート結果(第 6 学年対象)から <評価指標 3>

- ・「教科の学習が好きですか」という質問に肯定的に回答した児童の割合と、「教科の学習が大切だと思いますか」と回答した児童の割合の差を縮める。

	4月			1月		
	好き	大切	差	好き	大切	差
国語	59.4%	86.4%	27.0	70.2%	97.3%	27.1
算数	37.8%	83.8%	46.0	89.2%	94.6%	5.4

- ・「教科の学習内容が分かりますか」という質問に肯定的に回答した児童の割合を増やす。

	4月	1月	差
国語	70.2%	89.2%	+19.0
算数	64.0%	89.2%	+25.2

- ・「国語の授業で目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり、書いたりしているか」
肯定意見 (4月) 43.2% → (1月) 51.4%
- ・「国語の授業で意見を発表する時、うまく伝わるように話の組立を工夫しているか」
肯定意見 (4月) 37.8% → (1月) 51.4%
- ・「国語の授業で自分の考えを書く時、考えの理由が分かるように気をつけているか」
肯定意見 (4月) 67.7% → (1月) 86.5%
- ・「算数の授業で新しい問題に出会った時、それを解いてみたいと思うか」
肯定意見 (4月) 70.3% → (1月) 91.9%
- ・「算数の問題の解き方が分からない時は、あきらめずにいろいろな方法を考えるか」
肯定意見 (4月) 67.8% → (1月) 83.8%
- ・「算数の授業で学習したことを普段の生活の中で活用できないか考えるか」
肯定意見 (4月) 45.9% → (1月) 59.5%
- ・「算数の授業で問題を解く時、もっと簡単に解く方法がないか考えるか」
肯定意見 (4月) 75.7% → (1月) 81.1%
- ・「算数の授業で問題の解き方や考え方が分かるようにノートに書いているか」
肯定意見 (4月) 62.2% → (1月) 83.8%
- ・その他
「自分にはよいところがあるか」
肯定意見 (4月) 54.0% → (1月) 78.4%

〈考察〉

- 評価指標2では、「自分の考えを発表する機会」や「友達と話し合う機会」が大幅に増えているにもかかわらず、「自分の考えを発表したり、文章に書いたりすることが苦手」な児童が多いことが分かった。算数科だけでなく、いろいろな教科や場面でこのような経験を重ねる必要がある。
- 評価指標3では、まず、「好き」と「大切」の差を縮める項目では、国語科では「差」は縮まらなかったが、「好き」と「大切」がともに10ポイント上昇している。算数科では、「好き」が大幅に上昇し、「差」はかなり縮まった。
このほか、全体的に国語科に比べて算数科に関する項目で数値が上昇している。これは、昨年度・今年度と算数科に絞って取り組んできた成果といえる。同時に、言語活動の根幹を培う国語科での取組が不足していることの証左でもある。
自己肯定感については、24ポイント上昇した。これは、学力向上の取組だけでなく、学級経営の充実に向けた様々な取組があいまった結果である。

(3) 成果と課題

平成19年度の本校児童と全国との「較差」に衝撃を受けてから、あっという間に3年が過ぎてしまった感がある。1年目は、とにかく本校児童の学力の実態を何とかしようという思いで、先進校の取組に学びながら体制づくりや取り組むべき内容を明確化して取り組んだ。それこそ全教職員が同じ目標を共有し、実践していこうという意識や雰囲気確立した年であった。そこでできた流れは、2年目そして今年度と確かな取組へとつながっていったと実感している。

「教員の力量を高める取組」「基礎基本の定着を図る取組」「家庭学習の充実を図る取組」を三つの柱として全員で取り組んできたという一体感の中で、少しずつではあるが成果は上がってきている。

基本的な生活習慣や学習習慣、規範意識など、数値的にはまだまだ低いところがある。なかなか協力がもらえない保護者も少なからず存在する。まだまだ取り組むべき課題は山積している。とりわけ、(2)の考察でも述べたが、今年度取り組んだ「言語活動を効果的に活用した」取組を他の教科等にさらに広げていかねばならないと考えている。

分かる授業づくり

～よみとる算数～

御所市立名柄小学校

—わくわく・ドキドキ・みつけた！—

児童が「わくわく」しながら目を輝かせ、やってみようとする授業の設定、「ドキドキ」しながら、児童の興味・やる気が持続する授業の展開、児童自らが「みつけた！」と気付き・発見のある授業内容である「分かる授業づくり」をテーマとし、研修を深めてきた。

さらに、本校における県学力診断テスト結果の考察より、「読み取りの力が弱い」という児童の実態が明らかとなった。本年度は特に「読み取り」を重視した研修を行ってきた。そのような中で「学力調査活用アクションプラン」を推進した。

特に工夫した点は

- ・ 指導案と指導方法の研究
- ・ 職員研修の工夫
- ・ 環境づくり（人的、物的）
- ・ 研究冊子の作成（夢Ⅱ）

学校教育目標を合い言葉に！
夢と目標に向かってのびる学校

であるが、学校運営組織を改革し、部会を多く活用したことがこの事業を推進できた一つの要因であると考えられる。

「環境づくり」は、「算数ランド」と名付けて多目的ホールに領域別で量や図形などを体感できるコーナーの設営に今も取り組み続けている。他教科との関連が算数科でいわれているが、それを可能にする一つの工夫になったと思われる。



校長室で何度ももった学力推進委員会

平成19年度から組織改革で立ち上げた学力推進委員会で、全国学力・学習状況調査の結果を何度も考察し本校の課題を明らかにした。



職員会議での共通理解

それらの結果を共通理解し、時数確保の工夫をした。



名柄小
キャラクター
ひらめきみーくん

(1) 学力調査活用アクションプランを活用した取組の実際

算数科の学習指導要領の改訂において、これまでの算数的活動を見直し、工夫・改善を図ることで、児童に「算数は楽しい」「算数はおもしろい」「算数は生活に役立つ」と感じさせることが大切である。このことは、算数を学習する意義に気付かせることにつながる。

また、自分の考えを表現する活動や説明する活動も重視されている。つまり、これからの実践で求められていることは、これらの算数的活動を通して自分なりに考えたことを表現し、説明できる力を伸ばしていくことである。

そのためには「分かる」ということが重要になってくる。本校では、「授業が分かる」ということに力を入れてきた。

それには、教員が「分かる授業」を目指し、指導力を付けることが重要である。職員研修を何度も繰り返した。その基になる「児童の実態把握」いわゆる低学力になっている課題の追究をした。県学力診断テストの考察はもちろん、平成19年度から始まった全国学力・学習状況調査の分析・考察を校務分掌で3年前に立ち上げた学力推進委員会で繰り返し行い、研修部と連携し、職員会議で課題を追究した。

そして、本校では「よみとる算数」をテーマに、確かな学力の育成に「学力調査活用アクションプラン」を活用して取り組んだ。

以後、その取組を具体的に述べる。

① 「全国学力・学習状況調査」の分析から出てきた研究課題と取組の実際

自ら学ぶ子どもを育てる授業の創造

- ・「基礎・基本」の定着を図る。
- ・「分かる授業」を目指す。
- ・算数科における環境教育を推進する。
- ・算数科における「読み取り」の学習指導法の研究をする。
- ・教員の授業力の向上を目指す。

② 研究計画

- ・学校評価による課題と反省
- ・学力向上の手立て（研究授業と研修部、指導部、学力推進委員会の計画的な話し合い）
- ・具体的取組の実施（授業研修及び公表）
- ・家庭、地域との連携（インターネット、学年だより等）
- ・他教科、各部との連携（職員会議による共通理解）
- ・研修報告の伝達（その都度：印刷物等）
- ・県学力診断テスト、全国学力・学習状況調査等の考察を有効に利用し授業を展開する。
- ・次年度へ向けての反省と確認（成果、課題、改善・対策）

③ 学力調査活用アクションプランの実施日程

月	日	事 項
4	9	校内研修(研修年間計画についての検討1)
	14	校内研修(研修年間計画についての検討2)
6	16	校内研修 「読み取りを重視した授業づくり」 講師 校長 筒井通子
	23	校内研修(第1学年授業研究) 授業者 上段知子
	30	職員会議(学力調査活用アクションプラン推進事業についてとそれに向けてのスケジュール)
8	6	校内研修 「みんなで創る研修」(8/25)に向けて
	25	校内研修

		みんなで創る研修 A 「授業で使えるパソコン」 B 「実技系講習」 C 「キャリア教育」
9	29	職員会議(学力調査活用アクションプラン研究推進校の研究課題・研究計画・評価に関する事項)
10	5	学力推進委員会(現状での学力の把握)
	6	学力推進委員会「全国学力・学習状況の結果を活用した調査研究」の実施計画について
	6	職員会議(学力調査活用アクションプラン研究発表会開催要項について)
	20	校内研修(第2学年授業研究) 授業者 村島 康子
	26	算数部会
11	4	学力推進委員会(問題の検討・考察)
	5	高学年部会(算数指導案について)
	5	学力推進委員会(授業者 指導案検討)
	8	学力推進委員会(学習の展開の仕方の検討)
	9	学力推進委員会(指導案について)
	9	高学年部会(算数指導案について)
	10	学力推進委員会(授業案の検討)
	10	高学年部会(県学力診断テストについて)
	12	高学年部会(算数指導案について)
	22	学力推進委員会
12	3	学力調査活用アクションプラン研究発表会 授業者 第5学年 河井 秀太



【写真1】

- ・平成19年度からの全国学力・学習状況調査の考察

【写真2】

- ・全国学力・学習状況調査の結果を考察(研修部・学力推進委員会・職員会議)

【写真1】

【写真2】

④ 授業公開・取組の経過

平成22年12月3日(金) 公開授業

第5学年 授業者 河井 秀太

「B問題を使ったよみとる算数」

ー全国学力・学習状況調査結果の考察よりー

(本校の全国学力・学習状況調査問題の正答率の低いところ)

- ・御所市立名柄小学校の取組の報告

報告者 校長 筒井 通子

- ・指導講評 県教育委員会事務局学校教育課

指導主事 椿本 剛也

- ・講演 演題「学力向上に資する言語活動の充実を目指して」

講師 奈良教育大学 教授 棚橋 尚子

ア 指導案の工夫

本時案にし、授業者の思いが見る方々に通じるようにした。

- ・授業の運びが分かる。
- ・意図や取り上げる活動のねらいが分かる。



- ・児童の活動と児童への関わり方が分かる。

イ 第5学年 算数科学習指導案（以下番号は指導案内のもの）

単元名 「伝えよう！ —自分の考えた図形を説明しよう—」

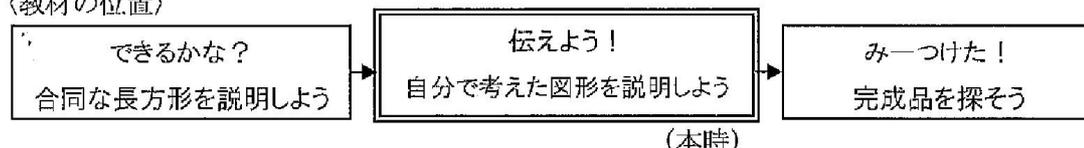
本時のねらい ・問題文から課題を読み取ることができる。

- ・図形の特徴について言葉を使って表現したり、理解したりすることができる。

本時のポイント《略》

○本時の教材について

〈教材の位置〉



〈教材の押さえどころ〉

設計図を使い本立てを構成する。残りの板を「合同」に分け、その形をみんなに分かりやすく説明することができる。

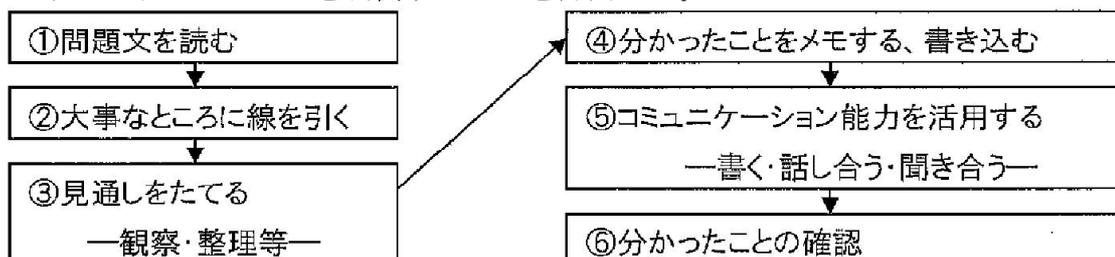
○授業の構成について

・教材へのせまり方

- ・平面（設計図）から立体（本立て）を想像しにくい児童が、活動を進めやすいように実物を用意したり実際に組み立てたりできる展開（前時）を計画している。
- ・長方形を二つの合同な形に分ける際に、既習の平面図形の知識を活用させることができ、言葉を用いて説明させることで図形の定義を深めることを期待している。

○分からせる方策

全国学力・学習状況調査の結果により、本校の児童の特徴として、B問題に代表されるような文章題の読解力や知識を活用する力が弱いという課題が出た。そのような課題に、どのように取り組んでいくかを考えたとき、平素の授業におけるスモールステップでの学習パターンが生かされることが大切であると考え、以下のようなパターンを展開することを計画した。



○工夫したこと

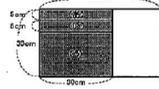
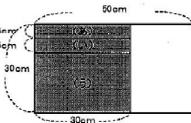
- ・自分の考えを深められるように、グループでの話し合いを用いた。
- ・グループ学習では、どの児童も活発に意見を出せるように1グループ3名とした。
- ・児童から考えられた設計図を基に完成品を用意し、自分たちの考えがどう反映されていくのかに興味をもたせるよう工夫した。

○学習集団・形態などのこと《略》

○児童への配慮《略》

○公開授業

指導案の工夫

本時の展開		指導の意図・留意点	教材教具
<p>学習活動</p> <p>・問題を読み、課題をつかむ。</p> <p>よしおさんたちは、図画工作の時間に本立てを作ることになりました。</p> <p>本立てを作るのに使うのは、下のような板です。この板は、たてが30cm、横が50cmの長方形です。</p> <p>長方形(あ)、(い)、(う)は、□の部分を下の図のように切って作ります。板の残りの□の部分にはあまりが出ないように切って、合同な2つの形(え)、(お)を作ります。</p> 	<p>・全体で一致し、大切なところに線を引かせる。その後、各自もう一度読み取る。</p> <p>・前時の課題と変わっているところに気付かせる。</p> <p>※1</p> <p>・前時に作った、長方形とは違う形のものを作ることと約束する。</p> <p>・合同な形は多くあることを伝え、様々な形に気付くことができるように意図付けする。</p>	<p>・掲示用問題文</p> <p>・問題プリント</p> <p>・画用紙</p> <p>・本立て(実物)</p>	<p>・うまく書けない児童には、どこが分からないのか考えさせ、質問させる。</p> <p>・実際に他の班の発表を聞く中で、分かりにくい表現や言い方に質問させる。</p> <p>・時間がなく、途中までしか説明の仕方が分からなかった班が出た場合は、途中まで説明させる。その後、設計図を見せ、説明の続きを他の班の児童に考えさせる。</p> <p>・掲示されたホワイトボードを比べ、説明の良いところに気付かせる。</p> <p>・分かりやすかった説明は、どこが良かったのか紹介させる。</p> <p>※2</p>
<p>・グループで話し合い、本立ての側面はどうすればいいのか考える。(グループ活動)</p> 	<p>・定規や分度器、コンパスを用いて、合同な形を見つけられないか、考えるよう助言する。</p> <p>・合同にしてもいい。</p> <p>・他に変わった形はないかな。</p> <p>・コンパスは使えないかな。</p> <p>・ホワイトボードを用意し、説明を書かせる。</p> <p>・説明し合う活動を軸にするため、時間を制限する。</p> <p>※2</p>	<p>(児童)</p> <p>・ものさし</p> <p>・三角定規</p> <p>・分度器</p> <p>・コンパス</p> <p>・ホワイトボード</p>	<p>・聞き取りメモをもとに実際に設計図を描く。</p> <p>・設計図をもとにして組み立てられた本立てを見て、どの班の設計図なのかを考える。</p> <p>・実際に組み立てられたものを見て、自分たちの考えがどう反映されていくのかに興味をもたせる。</p>
<p>・発表のルールを確認し、発表の練習をする。</p> <p>・書いてあるのけで分かるように説明する。</p> <p>・大きさが分かるように辺の長さや角度を使って説明する。</p> <p>・設計図を紙のたり書で梅したりしないで説明する。</p>	<p>・図形を説明する言葉(辺、角度、長さ、等しい)を使って説明すると良いことを伝える。(机間支援)</p>	<p>・ルール(掲示用)</p>	<p>・ワークシート</p> <p>・画用紙</p> <p>・児童の考えをもとに作られた本立て</p> <p>・ノート</p>

(2) 成果について

学力の向上

- ・見通しをもって課題に取りかかることができるようになり、問題解決につながった。(何を求められているのか、どう答えたらよいのか考える児童が増えた。)
- ・問題文の大切なところに線を引く習慣がついてきて題意の把握ができるようになった。
- ・答えの見積もりや、検討をつけてから計算する児童が増えてきた。
- ・算数的活動の楽しさを体感できた。
- ・筋道を立てて説明することで、自分の考えが相手に伝わることが分かり、伝えることの喜びを味わうことができ、学力の向上につながった。

指導方法の工夫改善

- ・教員の授業に対する意識のもち方が、今まで以上に研ぎ澄まされてきた。
- ・思考が深まる算数的活動を積極的に授業に取り入れるようになった。
- ・問題設定の意図や効果を考えた授業づくりを心掛けるようになった。
- ・児童の気付きや感じたことから進める学習を大切にするようになった。

学習意欲の向上

- ・児童が「分かってほしい」「できるようにになりたい」と思う気持ちからか、相手の考えに質問できるようになってきた。
- ・自分の考えをみんなに分かるように説明しようと努力するようになってきた。

(3) 課題について

全ての児童が「分かる」喜びを感じるころまでは達していない。児童の理解度に差があるのも事実である。個々に応じたきめ細かい指導がどこまで深められたかという点に課題が残る。その差を縮めるために身近な内容の教材・教具を取り入れた授業の構成も考えていく必要がある。時間的制限もある中、より効果的な工夫をしていかなければならない。また日常生活に生かせる指導法の研究を継続して行うことが大切である。

書く力を高める授業の研究

～主体的に考え表現する力の育成を目指して～

平群町立平群東小学校

(1) 学力調査活用アクションプランを活用した取組の実際

4月に実施された全国学力・学習状況調査の結果から、第6学年の児童は国語科の平均正答率はA、B問題とも県平均を上回っているが、「目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり、書いたりしているか。」「うまく伝わるように話の組み立てを工夫しているか。」「考えの理由が分かるように気を付けて書いているか。」など、表現活動に関する質問に対して肯定的な回答の割合が低いことが明らかになった。

本校は、2年前より「書く力を高める授業の研究」を主題に取り組んできたが、4月に全学年に行った「書くことに関する児童の実態調査」でも同様の課題が挙げられていた。そこで今年度、次の2点を柱に各学年で授業実践を行い、研修会や研究授業・協議を通して指導方法の工夫改善を進めてきた。

- 取材、構成、記述などの書く過程で、語彙の獲得や技能の習得に向けた手立ての工夫
- 伝える楽しさや喜びを実感し、書く意欲が高まるような評価・交流の場の設定

さらに、学習状況調査から研究主題に関する項目を選択し、第2～6学年を対象に9月と12月の2回、実態調査を行った。

各学年の取組（授業実践）の一端を以下に挙げる。

【第1学年】

1. 付けたい言葉の力 「特徴を表す言葉を集め、選択して書く力」
2. 指導の実際

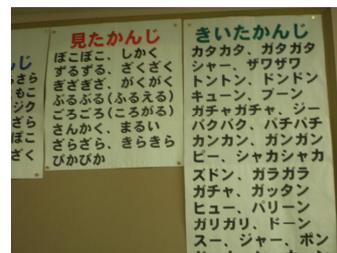
単元名 「知らせたいな 見せたいな」

「飼育小屋の動物を観察し、その特徴を分かりやすく伝えよう」

- ・表現するためのいろいろな言葉を知り「ことばのポケット」を作る。(下の写真)
- ・小動物と触れ合い、ワークシートに絵を描き、状態や様子をメモする。
- ・「ことばのポケット」の言葉を使って、メモを基に見付けたことを項目（目、くちばし、足など）ごとに短冊カードに書く。
- ・短冊カードの内容を原稿用紙に書く。
- ・家の人に読んでもらう。

3. 成果、改善された点、児童の変容など

「ことばのポケット」は、聞いた感じ・見た感じ・さわった感じ・思ったことなどの四つのポケットに分けて作った。児童たちは積極的にたくさんの意見を出し、「ざらざら」など見た感じにもさわった感じにも入るものもあるということに気付いている児童もいた。また、授業以外でも、「こんな言葉もある」と言葉集めをしている様子も見られた。動物の様子を短冊カードに書く時には、「ことばのポケット」を見たり、それ以外のオノマトペを使ったりして文を書いていた。また、この単元だけでなく、作文や、生活科の観察カードでも、オノマトペを使って書く児童がいた。



【第2学年】

1. 付けたい言葉の力

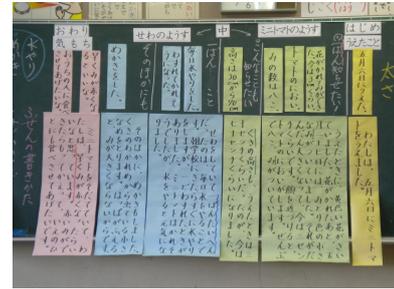
「説明する題材に必要な事柄を集め、簡単な組み立てを考えて書く力」

2. 指導の実際

単元名 「観察名人になろう」

「ミニトマトの成長をおうちの人につたえよう」

- ・ 観点を明確に観察・記録する。
- ・ 伝える内容と組み立てを考える。(付箋の活用)
- ・ 伝えたい事柄を選ぶ。
- ・ 記述する。モデル文を提示する。(右の写真)
- ・ 交流する。グループで読み合い、よかったところを伝え合う。



3. 成果、改善された点、児童の変容など

上述のような取組を進めた結果、例えば、具体性に欠ける説明文を書いていたA児は「観察の観点」や「比較の観点」を明確にして書く技能を身に付けた。そして、「分かりやすさ」を意識した説明ができるようになってきている。また、話が飛躍し一番伝えたいことの内容が伝わらない傾向があったB児は、「一番伝えたいこと」を付箋に書いて整理したり、書き出しを示したりしたところ、伝えたい事柄を取捨選択することができた。書くことに苦手意識をもっていたC児は、観察する部位と観点を明確にして記述するように指導した結果、書き方に変容が見られ、記述に要する時間も短くなった。学年全体の様子を見てみても「相手を意識する」「分かりやすく伝える」「理由を付けて説明する」等が意識してできるようになってきていると思われる。

【第3学年】

1. 付けたい言葉の力

「相手や目的意識をはっきりとさせて、自分が伝えたいことを、相手により伝わるように文の構成を考えながら書く力」

2. 指導の実際

単元「『アオムシコマユバチ』の紹介文を書こう」

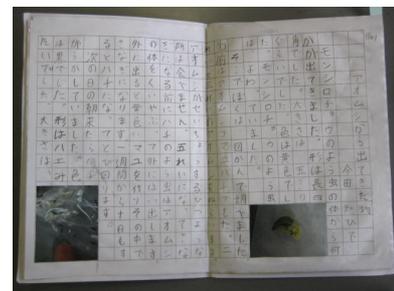
「付せんを使って、書きたいことを整理しよう」

- ・ 調べたことや、分かったこと、考えたことなどを付箋に書く。
- ・ 付箋を並び替えながら、文章の順序を考える。
- ・ 互いに、書いた文章を発表し合い、相互に評価し合う。
- ・ 交流する中で、質問されたことや、指摘されたことを取り入れて、より相手に伝わるように推敲をする。

3. 成果、改善された点、児童の変容など

書くことが苦手だった児童は、相手を意識することで、意欲的に取り組むことができた。何から書けばよいのか分からず書けなかった児童は、付箋を使うことで、順序を考える作業がしやすくなり、楽しんで考えることができた。

できあがった文を読み、感想を書いてもらうことで達成感を感じ、その後の書くことへの意欲につながったと考える。



できあがった紹介文

【第4学年】

1. 付けたい言葉の力

「アンケートの結果から、自分の考えが明確に伝わるように構成を考えて書く力」

2. 指導の実際

単元名「生活を見つめて」

「生活の中で気付いた身近な問題について、調べたことが伝わるように書こう」

- ・調べたいテーマを決める。
- ・テーマについて調べるために必要な項目を考える。
- ・アンケートを作成し、結果をグラフに表す。
- ・グラフを見て、「結果」と「結果から考えたこと」を書く。
- ・「結果」と「結果から考えたこと」を相互評価する。
- ・構成を考えて、報告文を書く。
- ・調べたことを発表する。



「結果」と「考えたこと」の記述を相互評価する児童

3. 成果、改善された点、児童の変容など

「結果」と「結果から考えたこと」を区別して書けていなかった児童が、相互評価をすることで区別して書くことができるようになった。この学習を通して、相手に伝わるように書くにはどうしたらよいかを意識して書くことができるようになってきた。実態調査の「国語の授業で目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり書いたりしているか。」の肯定的回答が、38%（9月）から47%（12月）に上昇した。

【第5学年】

1. 付けたい言葉の力

「自分が伝えたいこと、相手が知りたいことなどを考えて発信する力」

「編集作業を通して、集めた材料を目的に合わせて整理し、加工して伝える力」

2. 指導の実際

単元名「工夫して発信しよう」

「校内放送で、『校内ニュース』や『学校の不思議』を全校児童に伝えよう」

- ・全校児童に知らせたいテーマを決め、知りたい情報や疑問に迫れるように情報を集めるための取材をする。
- ・取材で得た情報を基にテーマに沿って内容を絞り、より正確に伝わるように言葉を選んで原稿を書く。
- ・その原稿を学級で発表し、他のグループとより正しく伝えられるための意見を交流し合い、それを考慮しながら原稿を書き直す。
- ・校内放送で、全校児童に発表する。



黒板に掲示した評価の観点を基に、付箋に書いてもらった意見を見ながらグループで考えている子どもたち。よりよく伝わるように文章を改善しようと話し合っている。

3. 成果、改善された点、児童の変容など

他のグループから付箋に書かれた意見をももらった後、グループで話し合い、伝わりにくかったり難しい言葉だったりしたところをより伝わりやすい原稿にし、発表することができた。

【第6学年】

1. 付けたい言葉の力

「自分の考えを明確にするために、文章全体の組み立ての効果を考えて書く力」

2. 指導の実際

単元名「自分の考えを発信しよう」

「『平和』について考え、意見文を書こう」

- ・「平和を壊すものは何か」「なぜ争いが起こるのか」について自分の主張を考える。
- ・モデル文から意見文に何を書かなければいけないのかを読み取り、構成を考える。
- ・段落別に色分けした付箋を使いながら文章を組み立てる。
- ・完成した構成メモを相互評価し、修正する。
- ・できあがった構成メモを基にコンピュータで文集に仕上げる。

3. 成果、改善された点、児童の変容など

書き進めていく中でだんだんずれていった自分の主張が、相互評価を行う事により修正できた。また、友達の意見文を読むことで、表現の仕方を取り入れることができた。

自分の意見を相手に分かりやすく伝えるという学習を通して、普段の授業の中でも自分の意見を発表する際に理由を明確に述べたり、より説得力のある意見を述べたりすることができるようになった。それに伴って発表すること自体にも積極性が見られるようになった。

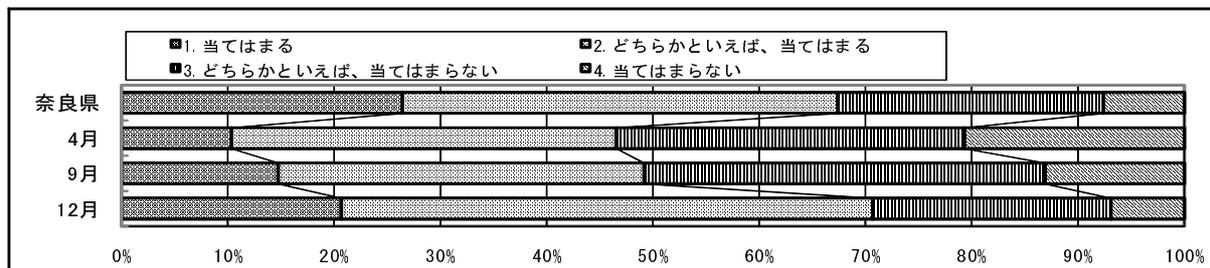


主張と根拠の整合性を相互評価する児童

(2) 成果について

- 文種や題材に応じて必要な語彙を使って表現する力が高まった。書くことに抵抗をもっていた児童が楽しんで意欲的に書けるようになってきている。
- 評価や交流活動を通して、読み手（聞き手）にとって必要な情報、分かりやすさなどを考え、表現する力が高まった。相手の反応から達成感を得られる学習活動になった。
- 実態調査の結果から、国語科の学習に関する児童の意識の向上が明らかになった。例えば第6学年の「国語の授業で自分の考えを書くとき、考えの理由が分かるように気を付けて書いていますか。」の質問では、4月→9月→12月と段階的に肯定的な回答が増え、4月から12月では20ポイント以上の向上が見られた。

実施した全ての学年を通してみても、全体の84%の項目で児童に意識の向上が見られる結果になった。学校全体で、本研究に取り組んだ成果といえる。



〔国語の授業で、自分の考えを書くとき、考えの理由が分かるように気を付けて書いていますか。〕

(3) 課題について

今後はさらに、次の2点を課題に継続的に取り組んでいきたい。

- 「『書くこと』の年間指導計画表」の見直しと改善（指導の系統性の明確化）
- 個に応じた指導・支援の工夫